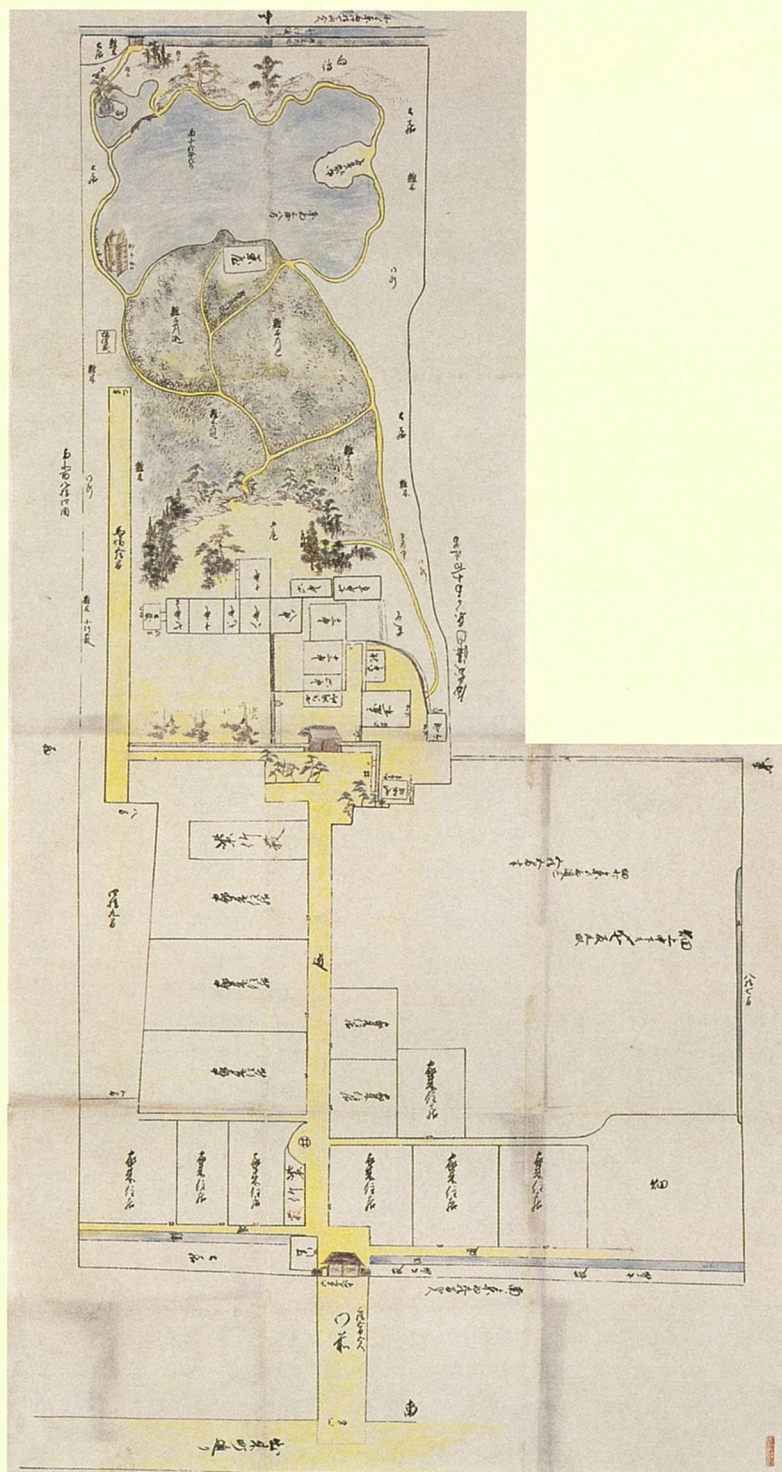


◆ 絵図のいろいろ 大曾根御屋敷之図 (解説八ページ)



蓬 左 HÔSA 右

NO. 65

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

三、蓬左文庫と海外2

海外認識の広がり

九月二十九日～十一月二十五日

蓬左文庫所蔵の海外関連資料を紹介する「蓬左文庫と海外」の展示会シリーズは、本年度前半の「蓬左文庫と海外1」―蓬左文庫と東アジア世界―に引き続き、幕末海外情報関係の資料を紹介します。

◆蓬左文庫と海外2

海外認識の広がり

江戸幕府は、いわゆる鎖国令（一六三九年）によって、対外関係と対外貿易とを厳格な統制下に置き、安政元年（一八五四）の開国までの約二〇〇年の期間、この体制を続けました。この期間、日本は、朝鮮（李氏朝鮮）とは正式な国交を結んでいましたが、中国、オランダとは貿易のみの関係でした。両国の貿易船の出入りや商取引は、九州の長崎に限られており、一般の日本人から嚴重にへだてられていました。

鎖国令以前に日本人が広く海外へ進出していたころにくらべ、海外に関する情報は、幕府の要人など、ごく一部の人々しか接する機会がありませんでした。しかし、海外に対する興味、関心がすたれることなく、知識人の間を主に、時代とともに海外への関心が高まっています。鎖国令以前に得た海外情報をもとに、西川如見（一六四八

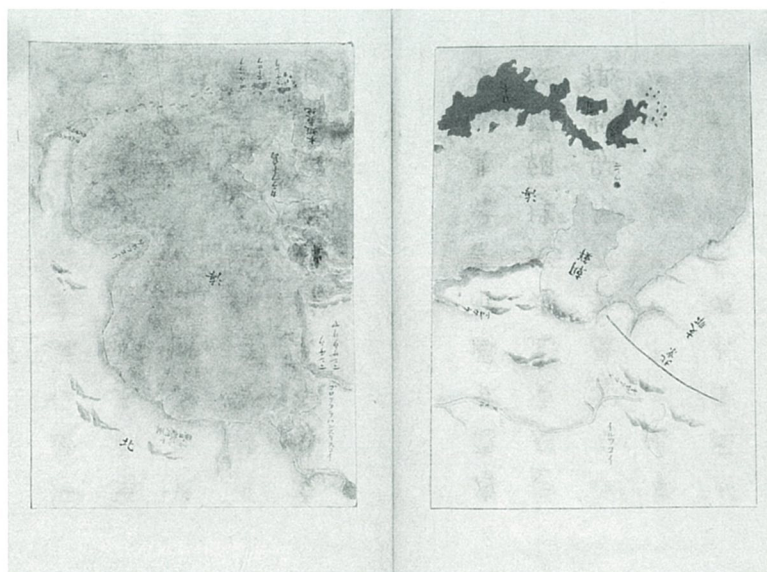
（一七二四）が商業貿易上の参考書として『華夷通商考』（一六九五年刊）を著わしました。幕府の政策顧問新井白石（一六五七～一七二五）は、密航してきたイタリア人宣教師シドッチを尋問して得た、新しい海外情報などに基き、世界地誌である『采覧異言』（一七二三年成立）を著わしました。西洋諸国の中で唯一通商関係にあったオランダに関して、『紅毛談』（一七六五年ごろ成立）、『紅毛雑話』（一七八七年刊）などが刊行されました。

一八世紀後半に入ると、西洋諸国の東アジアへの進出が本格的になってきました。ロシアはシベリアから太平洋沿岸に達し、同国船が千島・北海道（蝦夷地）に來航するようになりました。イギリスをはじめ、その他の外国船も日本の沿岸に出没するようになると、幕府は海防問題に取組み、沿岸警備や蝦夷地の調査がさかんに実施されました。その結果、朽木昌綱（一七五〇～一八〇二）の『泰西輿地図説』（一七八九年刊）のようなヨーロッパの地理・歴史書、ロシアに漂流した仙台藩の船頭らから大槻玄沢（一七五七～一八二七）が聞き書きした『環海異聞』（一八〇七年成立）や、アメリカに漂流した土佐の漁師中浜万次郎（ジョーン万次郎、一八二七～九八）の『漂流紀聞』（一八五二年ごろ成立）などの漂流民の見聞記、天明五・六年（一七八五・六）の幕府蝦夷地調査団の報告書『蝦夷拾遺』（一七八六年ごろ成立）（写真1）や、同調査に同行した最上徳内（一七五四～一八三六）の見聞記『蝦夷草紙』（一七九一年写）などの蝦夷の地誌が著述されました。

嘉永六年（一八五三）にアメリカ合衆国の使節

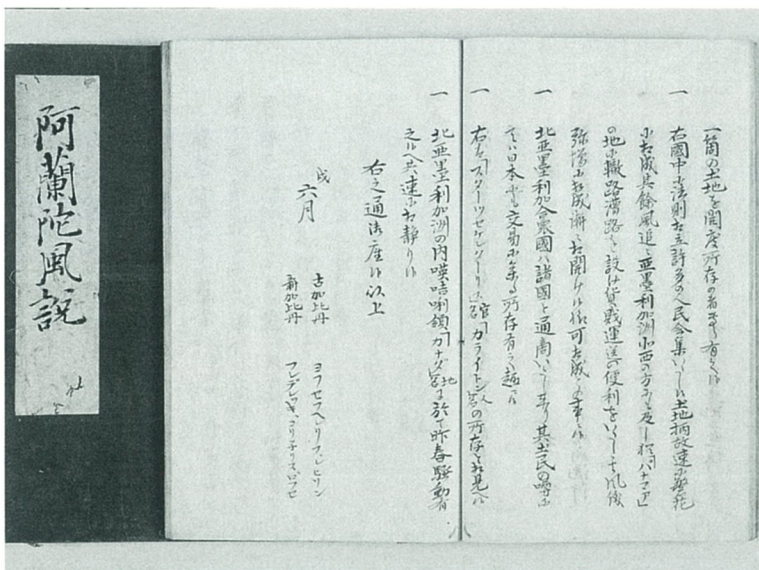
ペリーが軍艦四隻を率いて相模の浦賀に來航し、開国を求めました。「黒船」とよばれた西洋軍艦の威力を背景としたペリーの強硬な態度に幕府は屈して、翌安政元年に日米和親条約を結んで、下田・箱（函）館を開港しました。さらに安政五年（一八五八）に日米修好通商条約を結び、続いて同様の通商条約をロシア、オランダ、イギリス、フランスと結びました（安政の五カ国条約）。かくして、鎖国から開国に転換した日本は激動の時代を迎えます。

（写真1）『蝦夷拾遺』



尾張藩においても、一八世紀後半以降の海防問題への関心の高まりと、幕末の外国船の来航を契機として、海外情報関係の書物が収集されるようになったと思われます。嘉永二年（一八四九）に一四代藩主となった徳川慶勝（一八二四～八三）は、藩政改革に着手するとともに、水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇～六〇）、薩摩藩主島津斉彬（一

（写真2）「阿蘭陀風説書」



八〇九～五八）らと親交をもち、最新の海外情報を得ようとした。慶勝が収集した書物には、多くの西洋事情や海防関係の書物が含まれていますが、とくにペリー来航に際して作られたものが目立ちます。来航を予告した「阿蘭陀風説書」（オランダ船が幕府に提出した海外情報報告書）（写真2）や来航時の記録、様々な絵図類が収集されています。

最後に、蓬左文庫の海外情報関係の蔵書として水野正信の旧蔵書について紹介します。正信（一八〇五～六九）は、尾張藩の重臣大道寺家の家臣で、生涯に多数の書物を書写し、収集した人物です。大正三年（一九一四）に蓬左文庫に寄贈された約五五〇冊の旧蔵書のなかには、世相を記録した「青窓紀聞」二〇四冊、「采覧異言」や「環海異聞」などの海外情報関係の書物を集めた「青牖叢書」一〇三冊、「資治雑纂」九四冊が含まれています。海外情報関係の書物について、正信自身が閲覧し書写したものに加えて、全国から寄せられた情報が収録されたと思われます。ペリー来航の経緯がいち早く全国に流布したように、海外関係の情報に対する関心が人々を結びつけたのです。

海外からよせる激動の波に、幕末尾張藩の人々がどのような関心をもち、対処しようとしたかを、今回の展示会からしのんでいただければと思います。

業務縮小のお知らせ

「蓬左」64号でもお知らせしました通り、平成14年1月より、改築準備にともない、一部業務を縮小させていただきますことになりました。ご利用の皆様には大変ご迷惑をおかけし、申し訳ございませんが、どうぞよろしくご了承ください。

業務縮小期間中の業務内容は、下記の通りです。
新館開館は、平成16年度秋の予定です。

記

期 間：平成14年1月5日から平成16年9月30日まで
（平成15年度半ば以降は完全休館の予定）
休館日：毎週日曜日、第3金曜日、国民の休日、年末年始

休止する業務：展示、閲覧（「雑賀重良旧蔵書」は平成13年10月1日より閲覧休止）

従来通りおこなう業務：

- ・所蔵資料の複写（電子コピー）およびマイクロフィルムからの複製（即日渡しは不可）
- ・所蔵資料・業務などについての照会回答
- ・出版物・物品の販売

※ただし、複写複製・照会回答につきましては、改築準備作業の都合上、一部ご希望に添いかねる場合がございますが、ご了承ください。

くわしくは当文庫までお問い合わせください。

名古屋市蓬左文庫 (052) 935-2173

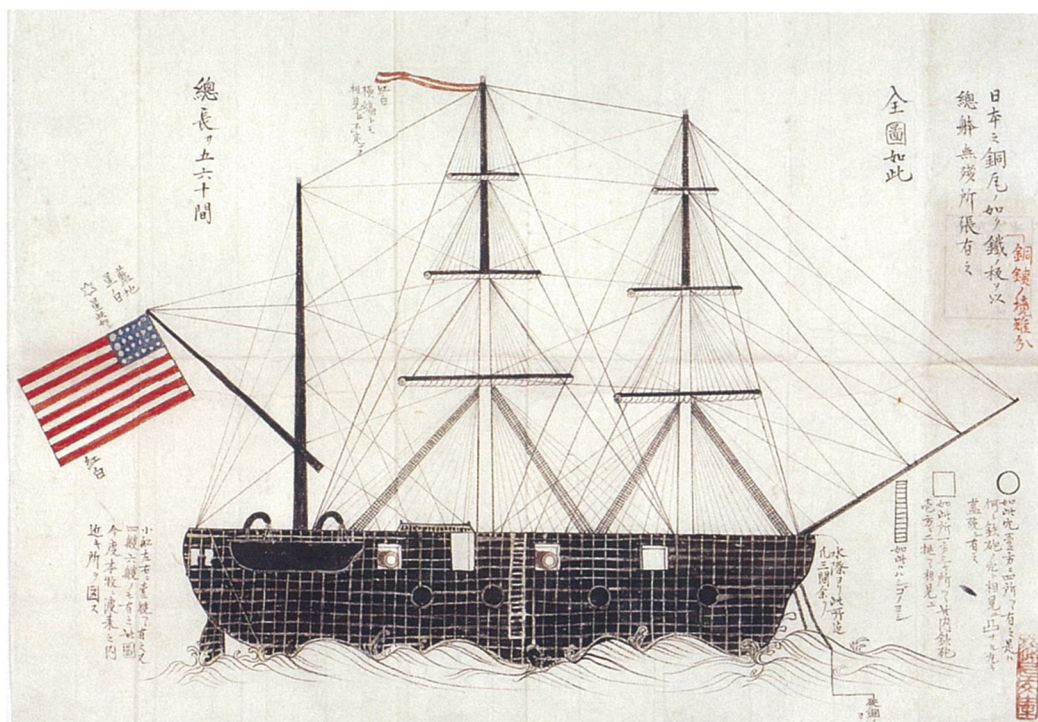


かんかいいぶん
▲環海異聞 3冊
江戸時代後期写 大槻玄沢著
28.9×20.4cm

ロシアに漂着した船頭らの見聞を、玄沢がまとめたもの。彼らはペテルブルクでロシア皇帝アレクサンドル1世(1777~1825 右)、その母 MARIA (1759~1828 左)と会見している。

蕃舶之図 4枚のうち
江戸時代後期写
31.0×43.0cm

浦賀沖に現れた黒船を描いた絵図。ペリーの率いる4隻のうち、プリマス号(帆船、排水量989トン、大砲22門装備)を描いたと思われる。



徳川園整備について

★徳川園と蓬左文庫の歴史

昭和6年(1931)、尾張徳川家19代当主徳川義親氏により、徳川家大曾根邸のうち表書院などの建物や庭園の一部が名古屋市に寄付され、翌年、「徳川園」として市民に開放されました。隣接する敷地には、昭和10年(1935)、財団法人徳川黎明会運営の徳川美術館が開館しました。

また、昭和25年(1950)には、東京目白の徳川家邸内にあった蓬左文庫が、徳川黎明会から名古屋市に移管され、翌年、「名古屋市蓬左文庫」として、徳川園内の現在地で一般公開されました。



昭和30年代後半の徳川園
庭園より正門を望む。



昭和30年代初め頃の蓬左文庫

扁額は徳川義親氏の揮毫によるもの(現・徳川黎明会所蔵)。
中央の人物は故・織茂三郎氏。

★徳川園整備と新しい蓬左文庫

今回の徳川園整備事業は、蓬左文庫、徳川園および新設する池水回遊式日本庭園が一体となった歴史文化拠点づくりを目指すものです。平成13年度秋より着工し、平成16年度秋の完成を予定しています。

蓬左文庫は現在地の東側に新館が建設され、「展示」「閲覧」「教育普及」各事業の充実をはかります。

★主な事業予定

展示：テーマ展示室、企画展示室、映像ルームなどを設置。テーマ展示室では蓬左文庫の蔵書と徳川美術館の大名道具を合わせて展示し、近世武家文化をわかりやすく表現します。

閲覧：閲覧室の面積を拡張し、参考図書の拡充、情報システムの導入などによって、より利用しやすい環境を作ります。

教育普及：徳川園全体や近世武家文化に関わる幅広いテーマの講座、講演会などを企画します。



▲全体イメージパース▲

徳川園整備についての問い合わせ先
名古屋市緑政土木局緑地部緑地施設課
TEL：972-2484 FAX972-4143
名古屋市教育委員会総務部施設課
TEL：972-3226 FAX972-4176

尾張国海東郡砂子の飯田氏について

——天下人と尾張武士2——

戦国期から江戸時代にかけての尾張地方の歴史を考ふる上で、同地方を基盤に登場した統一政権との関わりを明らかにする必要がある。本稿では、『天下人と尾張武士——藩士名寄』にみる吉田主水家政の軌跡（『蓬左』六一）に引き続いて、尾張武士と天下人の関係を考察することで、政治支配の面から尾張地方の歴史の特性を追究してみたい。

飯田氏は、清和源氏満快流（伊那源氏）の子孫と称し、信濃国伊那郡飯田から尾張国海東郡砂子（海部郡大治町砂子付近）に移住してきたと伝える。そののち、尾張出身の武士として、飯田氏は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下人に相次いで仕え、尾張藩士・幕府旗本の二系統に分かれた。

飯田氏の系譜に関しては、尾張藩士の系譜集である『士林泝洄』（一七四七年成立）がある。江戸幕府が編纂した大名・旗本諸家の系譜集である『寛永諸家系図伝』（一六四三年完成）、『寛政重修諸家譜』（一八二二年完成）にも記載があり、『士林泝洄』の

記事を補うことができる。戦国期から江戸初期にかけての飯田氏、弥兵衛宅重から源市郎武住までの関係略系図を左に示す。

飯田氏と海東郡砂子

蓬左文庫所蔵の『士林泝洄』巻七五（目録番号一四〇一二）の飯田氏の系譜（七頁写真）は、源一郎某（宅次、一五五五～一六一七）から記事が始まっているが、家伝文書（註）によれば飯田氏と海東郡砂子との関係は一六世紀前半にまでさかのぼれる。永正一四年（一五一七）十二月に飯田隼人は年貢銀九貫二〇〇文を納めており、大永四年（一五二四）十二月には飯田彦太郎が色成年貢一貫一〇〇文を納めている。こうした年貢を請取った領主が誰かは確定できていないが、飯田氏は領主に年貢を納める名主の地位にあった一族と推定される。

弘治三年（一五五七）四月に、尾張清須城主織田信長は、飯田彦太郎跡式・買得分を飯田弥兵衛に給与した（家伝文書）。この弥兵衛は、『寛永諸家系図伝』などによれば、源一郎宅次の父弥兵衛宅重にあたると思われる。信長が「もし、彦太郎子孫有りて、申し様有りといえども、いささかも相違あるべからず」

と宅重に保証したことからみて、宅重は彦太郎の子孫ではなかった。彦太郎の子孫を指し置いて、信長が同族の宅重に給与した理由としては、彦太郎側が敵対して処罰を受けたのか、または宅重が信長に積極的に属したなどの状況が想定される。信長は、前年八月の稲生合戦にみられるように、尾張国内制覇の戦いを進めており、自分に属した尾張武士たちに報いる必要があったのである。信長から給与された内容は、名主職であつて、領主に年貢を納める立場は従来どおりであつたことが、関係史料から判明する。

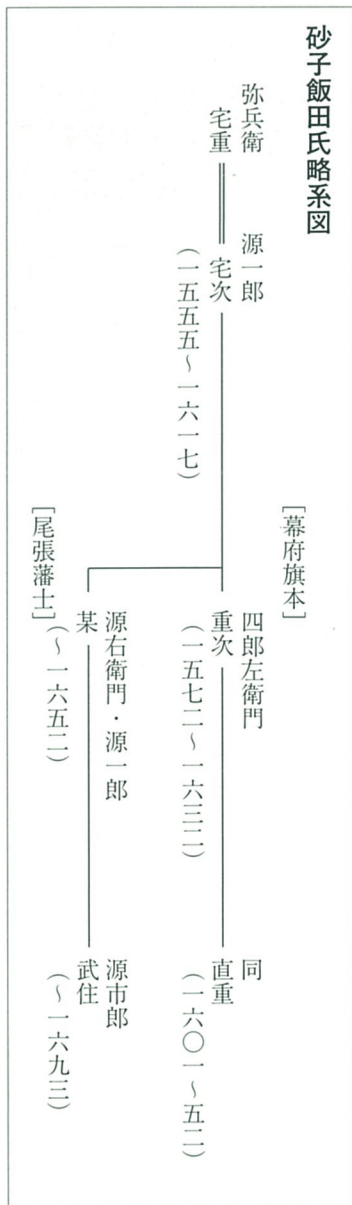
本能寺の変（一五八二）による織田信長の死後、飯田宅重・宅次父子は、尾張を支配した信長二男信雄に仕えた。天正一二年（一五八四）の小牧・長久手の陣では、信雄・徳川家康連合軍と秀吉軍とが戦った。『寛永諸家系図伝』によれば、秀吉方の滝川一益が尾張蟹江城に侵攻した際に、家康は宅重父子を案内者として同城を奪回したと伝える。天正一四年七月には、宅次は信雄から須奈古（砂子）郷の内三〇〇貫文を給与されており、飯田氏は年貢を請取る領主に出世したといえよう（同前）。

天正一八年（一五九〇）に豊臣秀吉により織田信雄が追放されたのち、飯田宅次は秀吉に仕えて、天正一十九年四月に近江国愛智郡押立郷一色村之内三〇〇石を給与された（同前）。関白豊臣秀次失脚後の文禄四年（一五九五）には、兼松氏・沢井氏などの尾張武士と同様に、宅次は秀吉から尾張国海東郡砂子を安堵されたと推測される。

飯田氏と徳川家康

豊臣秀吉の病死（一五九八年）後に『寛永諸家系図伝』によれば、「慶長五年（一六〇〇）、伏見にお

砂子飯田氏略系図



ゐて大権現（家康）にまみえたてまつる。すなわち本領尾張の国の内砂子を拝領す。大権現関東に御鷹野の時、御鷹をあげかりて供奉す。」とあり、飯田宅次は徳川家康に仕えて本領砂子を安堵された。尾張の大半が、家康の四男松平忠吉に給与された際にも、飯田宅次は忠吉に属さず、翌六年五月近江高島郡で替地を与えられ、家康にそのまま仕えた（家伝文書）。

宅次の二男源右衛門某（実名不詳、一六五二年没）は父の領地を相続し、徳川家康に仕えた。のち、家康九男徳川義直に仕えて御鷹役となった。慶長二年（一六〇七）に松平忠吉が病死したのち、弟の義直が甲府城主から清須城主に転封となり、初代尾張藩主となっていたのである。元和六年（一六二〇）九月に、義直が藩主として初めて一斉に領地給与の黒印状を出した際に、源一郎（源右衛門からの改名と推定される）は砂子村の内三〇〇石を安堵されている（同前）。以後、その子孫である飯田源一郎家は、廃藩まで尾張藩士として続く。寛政二年（一七九〇）に養子相続のため三〇〇石から二〇〇石に減らされたが、引き続き砂子村内の領地を保つことができた。飯田源一郎家は、弥兵衛宅重以来の屋敷を砂子村に江戸時代を通じて維持しており、戦国期以来の屋敷地（在所）を保持し続けた生駒氏や八神毛利氏などの尾張衆と同様に、強固な在地性を感じさせるのである。

天下人と鷹狩り

砂子の飯田氏と同様の状況が、尾張國中島郡高御堂村（稲沢市高御堂町付近）の吉田主水家にもみられることをすでに指摘した（『蓬左』六一参照）。両

者は、関ヶ原戦後に松平忠吉に属することなく、鷹匠として家康直臣となったことが注目される。彼らは、家康が非常な鷹狩りの愛好者であったため、特別に呼ばれたと理解すべきであろうか。では、なぜ尾張の鷹匠でなければならなかったのかを明らかにする必要がある。

そもそも、関ヶ原戦後に徳川家康の直臣になったのは両者に限らない。家康が、兼松氏などの在地性の強い尾張衆を清須城主松平忠吉に附属させたことはよく知られているが、尾張衆のすべてが忠吉に附属せられたのではない。海西郡赤目（海部郡八開村元赤目付近）の横井氏一族の大半も、家康直臣となっている。横井氏も鷹狩の技術を伝える一族として著名である。

知多郡内においても、関ヶ原戦後に徳川家康は、師崎（知多郡南知多町）の千賀氏、小川（同郡東浦町）の水野氏、河和（同郡美浜町）の水野氏（実際は戸田氏の一族）などに、本領を回復させて、直臣としたのである。千賀氏、水野氏らは、知多水軍を構成する海の武士団として、東西海上交通の枢要の地である知多郡に配置されたと理解できよう。

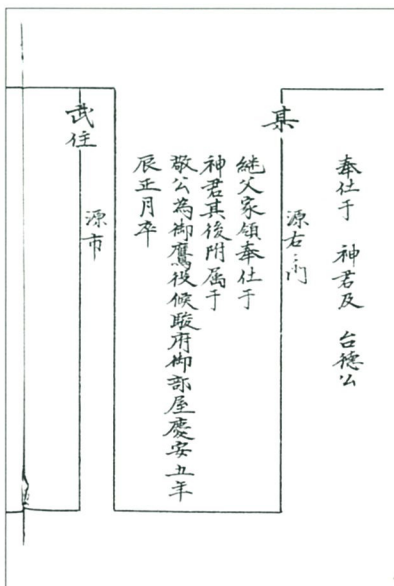
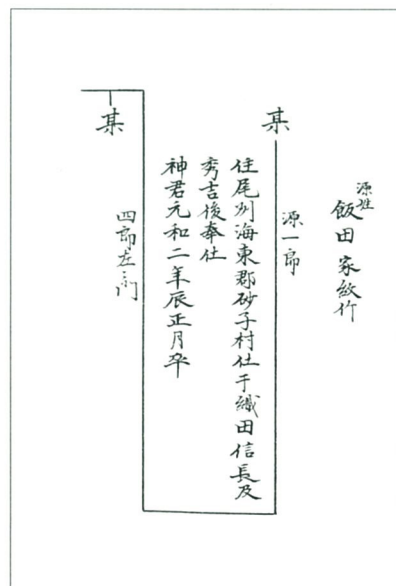
とすれば、横井氏、砂子飯田氏、吉田主水家政らの役割も推測できる。鷹匠は、鷹狩のために地理に精通することが不可欠である。関ヶ原合戦のような木曾三川をはさんだ東西対決に備えての現地案内役の役割を期待されていたのではないか。飯田氏が、小牧・長久手の陣の際に蟹江城攻めの案内役を勤めた由緒を誇る理由がそこにあるう。秀吉は、尾張を直轄地化するとともに、尾張出身の直臣（尾張衆）を配置した。家康は、尾張を四男忠吉に与えたが、一部の尾張衆を直臣として残した。家康は、尾張の

戦略上の重要さを考慮して、秀吉の政策を部分的に継承したといえよう。

彼ら徳川家康直臣の存在により、関ヶ原戦後の松平忠吉の領国尾張は一円・排他的なものではなかった。その政策転換により、徳川將軍家は飯田氏らを尾張藩主徳川義直に附属させ、義直の領国支配の一円化が進展することになる。

註 『弘文荘古文書目録』（昭和四八年刊）ほか。

（下村信博）



◆絵図のいろいろ (表紙口絵解説)



大曾根御屋敷之図 (図940)

江戸時代後期写 171.4×90.2cm
北西角の池水付近。船小屋が描かれている。

二代尾張藩主徳川光友(一六二五―一七〇〇)没後に縮小された「大曾根御下屋敷」の、享保五年(一七二〇)までの御殿とその周辺の概要を描いた絵図。

光友は、初代藩主徳川義直(一六〇〇―一五〇〇)の側室お尉(吉田氏、歎喜院)から、名古屋城下の北東の大曾根の地で生まれたと伝えられる。光友は文武に才を発揮し、御三家筆頭として將軍家を補佐するとともに、父義直の藩政を継承し、藩制を確立させた。

光友は、延宝七年(一六七九)に名古屋城下の東部に、休息と饗応のための別邸として「御下屋敷」を建設していたが、元禄六年(一六九三)に藩主の地位を長男綱誠に譲るとともに、自らの隠居所として大曾根に大曾根御下屋敷の建設をはじめた。同地には成瀬・石河・渡辺家などの重臣の下屋敷があつたが、三家から土地を収公して建設された。

総面積一三万坪余(現徳川園の約九・五倍)の広大な屋敷内には、御殿と十六挺立ての船を浮かべることができた大池を設け、周囲は田畑と丘によつて区画されて、郊外の自然に恵まれた隠居所という姿であつた。

光友没後には、大半の敷地は、成瀬・石河・渡辺三家に返還されたが、なお「御逝去の地」として縮小された御殿を含む五万坪余の地が、藩の別邸として残された。本絵図に描かれた状況は、この時期のものであるが、享保五年には、残りの地もすべて成瀬家に返還されて、大曾根御下屋敷は解消された。

本絵図は、縦横一二枚の紙を貼り継いだ上に描かれており、現在は修補の際に裏打ちがほどこされている。全体を墨書きし、一部に彩色がほどこされて、縮小されたのちの御殿や庭、その周辺の状況をよくうかがうことができる。とくに、庭などは絵画的に表現されており、残された二つの門のうち、外門は瓦葺(黒色)で、内門は萱葺(茶色)と判別できたり、池中の船小屋に二隻の船が描かれているなど、見た目にも興味の湧く資料といえる。

明治維新後に、成瀬家など三家から同地が尾張徳川家に返上され、尾張徳川家の名古屋大曾根邸となり、現在では徳川美術館や、蓬左文庫を含む徳川園となっている。

◆「蓬左」休刊のお知らせ

今号をもちまして、文庫日より「蓬左」はしばらく休刊させていただきます。新館開館後、また新しい形でお目にかかると思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

名古屋市蓬左文庫

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地

TEL (052) 935-2173

FAX (052) 937-0350

◆交通

名古屋駅、栄より

市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)

「新出来」下車、徒歩5分

大曾根より

JR中央線「大曾根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館日 毎月曜日、第3金曜日

祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館)

年末・年始(12月28日～1月4日)

閲覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。

閲覧時間 開架図書 午前9時30分～12時
午後1時～5時

開架図書 午前9時30分～午後5時

複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時

展示 所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

平成14年1月より業務縮小いたします……くわしくは3Pをごらんください。

「蓬左」第65号 ☆平成13年9月30日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(名古屋市東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源印刷工業(株) ※この冊子は再生紙(古紙配合率100%、白色度80%)を使用しています。